京都造形芸術大学　舞台芸術研究センター　共同利用・共同研究拠点
文部科学省「舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点」

「舞台芸術の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点」は、具体的には、本学研究者が中心となって行う「テーマ研究課題」と、学外の研究者に広く公募する「公募研究課題」（平成26年度より実施）に基づいた各研究プロジェクトが、本学の所有する本格的な劇場施設である「京都芸術劇場」（大劇場：春秋座、小劇場：studio21）を使用した「劇場実験」を核として、上記目的を達成し、広く公開していこうとするものです。

## テーマ研究Ⅰ

# 「近代日本語における＜声＞と＜語り＞」

**（全7回予定）**

「近代日本語における〈声〉と〈語り〉」を論じるには、その前史というか、前提となる文化的記憶と言うべき「日本の伝統芸能における〈語り〉」の構造と作用を見ておかねばなりません。

そこで、まずは「日本の伝統演劇における〈語り〉」について見ておこうと思います。

従って、第一回と第三回を、「伝統演劇」にあてる予定で、まず第一回目は、現代の狂言を代表する人間国宝の和泉流野村万作師をお招きして、狂言における「語り」の代表的な演目を実演していただきます。というのも、狂言は、日本の伝統演劇においては、ほとんど例外的と言ってよいほど、「台詞劇」として洗練されたジャンルですが、その「台詞」は、単に日常的な会話の再現ではなく、時として「呪術的な」異形の姿をとる事があります。

そのような「語りの演技」の典型として、大曲『釣狐』の前段に置かれた「古狐が化けた白蔵主（はくぞうす）」が、狐を獲る甥の猟師に、「九尾の狐」の故事を語って、狐の恐るべきことを説き聞かせる「白蔵主の語り」を、面や装束は着けない形で演じていただきます。

狂言の世界では、「猿に始まり狐に終わる」と言われるように、『釣狐』は、最も重い曲とされていますが、それは、「語り」のもつ「呪力」への畏怖の念が、演者に伝えられているからでしょう。

モデレーター：渡邊守章（演出家・京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター 所長）

詳細は裏面へ

# 京都芸術劇場 春秋座

【お問い合わせ先】京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター 担当：川原・塚本
〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116
＜電話＞075-791-9437（平日 10-17 時）